

【子どもの観察例:ラシエル】（女児 1971年10月22日生;3歳8ヶ月から4ヶ月間の記録）

・1975/06/12・・・ラシエルは、ミルク・サークルの時間、おやつとして一片のリンゴを手渡された。それを手にしながら、手拭き用の紙を欲しがった。ハリエッタにわざわざそれをお願いしに行く。〈じゃあ、すぐに持ってくるわね〉とハリエッタが彼女に告げた。それでラシエルは自分の椅子に戻った。ところが明らかにハリエッタはそれをうっかり失念したようだ。ラシエルはそのままじっとしたまま、自分の指先を眺めている。どうも不安げな顔つきである。しかしごく直に、自分の汚れた手をどうやら気にしなくなった。皆と一緒にいっくら朗らかに歌やらリズム運動に興じた。むしろ意外なほどに・・・。

〔日頃の家庭での躰けの良さを反映しているのだろうが、他の子と比べて、清潔感が際立つ。ただ、そのことでの警戒心が尋常ではない。いかにも‘無菌培養の子ども’といった感じで、彼女がほんの少しの汚れにも免疫力がないのでは困る。ハリエッタがわざとラシエルのお願いしたティッシュを失念したはずもないが、どこか彼女がもっとプレイグループでタフになって欲しいと思っていたことは間違いない。それで思惑どおりかどうかは分からないが、ミルクサークルの時間の後半のラシエルは目覚しい！〕

〔おとなしく、目立たないラシエルだが、女の子らとは徐々にうまく行っているようだ。万事おっかなびっくりだが、女の子らが相手だと、より自発的な会話が少しずつ増えてきつつある。取り敢えず女の子らは、彼女の警戒の対象にはならないというのも興味深い。その一方で男の子らは汚いdirtyし、乱暴だからと視野の外に爪弾きしているのかしら。まるでガラス・ケースの中にいるみたいに、周りが秩序立っていて清潔に保たれていないと我が身が持たないといった感じなのだろう。生き活きとした感情はまだ吐露されておらず、まだ眠っているといったほうが正しいようだ。と同時に、彼女の中の無秩序で混沌とした情動もごく安全に内に閉じこめられたまま。外見もそして内側もまるでシミ一つない spotless。そんな無垢なる彼女の印象は悪くないのだが・・・。やはり欲を言えば、物足りない。〕

・1975/07/17・・・ラシエルは積み木ブロックを積んでタワーを作っていた。一つずつブロックを積み上げるとき、その度に、いちいち彼女は文字通りからだをわなわな震わせていた。そして、もしもの場合タワーが崩れ落ちてしまう瞬間には支えなきゃと思ったのか、予めの用意に両腕を差しのべている。そのおっかなびっくりの物腰と大真面目なものには、ちょっと笑えたほどだが・・・。彼女の真剣さは伝わってきた。

〔彼女はいつもきちんとした可愛らしい服装で現れる。透き通った肌をしていて、長めのカーリーなブロンドの髪をしている。まるでお人形さんみたいである。どうも今ひとつ覇気がない。なにやらいつも弱々しげに見える。どうか今日はそうした‘殻’を破れそうな気配だ。事実、一度積み木のタワーが崩れ落ちた。全部ではなく、上の一部であったが・・・。それでも彼女はパニックにはならず、思ったより‘大惨事’というわけでもなかったというふうに安堵したのか、落ち着いていた。それで自信を得たのか、もう一回とタワーづくりに再挑戦した。まるで遊び慣れていない。一人っ子で、遊び友だちがいなかったせいか。実際のところ、彼女はほぼ4歳なわけだから、年齢からしてごくごく幼稚といった印象である。〕

・1975/09/18・ラシエルは、顔色がすぐれず、鬱々として様子でいる。彼女は机でジグソーパズルをしていた。だが、あまりいい成果を得たとはいえない。何やら他のことに気を奪われているような印象である。その一方で、彼女の身近ではサイモンが母親の去った後で大騒ぎをして泣き喚いていた。それで彼がラシエルに近寄り、<ぼくのこと、お世話してくれる誰かが欲しいの。ぼく、ラシエルのお隣に座りたい…>と言う。しかしながら、この必死に彼女にすがりつこうとする彼を彼女は無視する。私が、<サイモンはラシエルが好きなの。誰か彼のお世話をしてくれる人が欲しいんですけど。サイモンのこと、お世話してくれる？>と訊ねるが、ラシエルは黙ったまま、ウンでもスンでもない。無反応なまま。実際のところ、幼稚っぽいサイモンだが、彼女の方が4ヶ月年下なのである。無理もない。……ところが、そのすぐ後、不意に彼女が私に、<あのね、ママに赤ちゃんができたの…>とモゴモゴと話し始めた。何ごとかを訴えたかったらしい。<あらまあ、それはいいわね。赤ちゃんは男の子なの、女の子なの？>と私が訊ねると、しばらく間を置いて、<女の子よ！>と決然とした声音で返答する。それから<クリスマスに生まれるの…>と付け加える。<あら、それじゃ、まだ生まれていないのね。ママのお腹の中なのね>と私が言うと、彼女は頷く。なにやら気掛かりな浮かぬ顔つきをする。[そんな状況では確かにサイモンをお世話するどころではなかったろう。ラシエルだって泣きたい気分だったのだから…。だけど、とにかく初めてラシエルは、自発的に私に自分を語ってくれた。ちょっと感動した。]

この後、ラシエルが玄関口の近くの廊下に一人妙な具合に立ちすくんでいるのを当番の母親が発見し、声を掛けた。それからすぐに彼女は室内へと戻ってきて、椅子に静かに座る。どうやら涙ぐんでいたらしく、頻りに鼻やら顔やらを手で拭いている。顔がくしゃくしゃとなっていて、まるで熱があるみたいなふうである。<くたびれちゃった…>と、いかにも疲れきった様子で言う。常日頃はない、心乱れた(!)ラシエルだったが、どこかもう我慢の限界といったところだったのだろう。彼女の「ガラス・ケース」としてこれまで彼女を抱え込んで保護してきた母親の存在がもはや保証の限りではなくなり、なにやら彼女の外も内も秩序が崩れたような…。だが、そんな彼女も悪くない！

ミルク・サークルの時間になって、ラシエルはハリエッタのお隣の椅子に座る。そのように私が配慮してあげたわけだが、ハリエッタは子どもら皆の‘マミー’なのだし、ラシエルも彼女になついでいなくてならない。ハリエッタの自分への気配りに安心したのか、徐々に彼女はいくらか惨めさを払拭したみたいで、皆との遊びに参加し始めた。特に、お遊戯で《誰がどんなお洋服を着てるかな》という歌に合わせて、自分の番がきて、自分の着ている服が皆に注目されたとき、彼女は微笑んだ。自意識も手伝ってか、ちょっと恥ずかしそうであったが…。[おそらくおしゃれな衣服は彼女の母親の嗜好でもあったろう。しかし彼女はもはや母親とワン・セットではなく、‘別の人格’として自分を意識し始めている。グループで、<さあ、次はあなたの番よ！>と言われる、そんなことからラシエルの自意識は育まれてゆくだろう。]

ラシエルはドレッシング・コーナーへ行った。長いスカートを履こうとする。結構長めだから、履くのは面倒だ。それでいつものように、何気なく私は彼女にも手を貸してやろうとした。ところがちょっと唖然とした。彼女は私に身を委ねて、まったくのところされるがままで、自分から自分でスカートを履こうとする動作

を一切しないのだ。彼女のその完璧な‘受身性 passivity’にはいささか驚いた。ほんとうにラシエルは‘お人形さん’になってるのかと内心呆れるほどであった。

このしばらく後、ラシエルは乳母車を押していた。その中を見ると女の子の人形があった。丸裸で何も身に付けていない。まるで気が回らないというか、いかにも遊び慣れていない。呆れるほどだ。それで私が手近なところから一枚の毛布を探してきて、<お人形さんに…>と彼女に手渡した。すると、彼女はそれを受け取り、乳母車のなかの女の子の人形をその毛布で包んでやった。その母親らしい手つきから、まるで彼女に全然その気がないわけでもなかったし、お世話をするということが知らないわけでもなかったのだと知る。そして彼女は歩み去った。お人形さんを散歩に連れてゆくということであつたろう。結構満足げでハッピーな様子であつた。どうしていか分かんないと内心途方に暮れて立ち往生ではなく、こうすればいいんだわということが見極められつつある。そこへ一歩踏み込めればいい。他の子どもらに先導されて、大いに遊んでもらう必要がある。そこに、シモーヌが登場。乗っていたおもちゃの自動車をラシエルの乳母車に体当たりさせた。それは勿論シモーヌが彼女を挑発するためであつたのは明らかだが、ラシエルはそれに対して敵意も攻撃性もなんらその片鱗も一切見せず、シモーヌの乱暴にも抗議することもなしに、それに特に困ったふうでも気を動転させるわけでもなく、それ以上シモーヌとの直接対決を避けて、一人平静な面持ちで乳母車を押して歩み去る。〔シモーヌにただ悪気があつただけとも思えない。どちらかという、ラシエルに親しみを示したつもりなのだろうが、それが空振りとなつたのは残念ともいえた。シモーヌの意気軒昂さはラシエルにとっては迷惑であり、厄介でしかなかったのだろう。このラシエルの及び腰は、‘負けん気の塊’みたいなシモーヌが相手ならば一応正解とも言えたが、「逃げるが勝ち」ばかりでは芸がない。‘人間的’な触れ合いに欠ける。むしろシモーヌがいつかラシエルの‘殻’を破るきっかけになることがあればいいのだが…。〕

・1975/09/25・ラシエルは「スライド・ハウス」の辺りをうろついていた。他の子どもらが滑り台を使っているのを眺めながら、自分もそうしたいのは山々だといった悩ましげな風情で、<でも、からだをぶつかけたりするの、イヤだもの(I don't want to have a bump)…>とかぶつぶつ言っている。だが結局のところスライド・ハウスの中に潜り込んだ。そこはシモーヌやらフェイやら女の子らが集っていて、皆で‘お家’ごっこをしていたのだ。……やがてラシエルは、この‘お家’、つまりスライド・ハウスの天辺に陣取り、一人で軽やかに歌い始めた。<わたし、大きくなるわ。大きなお姉ちゃんだもの、でも…(I am growing up! I am a big girl! But…)>と。そこでふと考えが中断された。彼女は何やらぼんやりと宙に浮いた感じになり、もはや自分の思考の糸口を掴めないまま、別な事に気を奪われた。確かにお姉ちゃんになるのも悪くはないが、でもやっぱりどこか「ママの赤ちゃん」のままがいいというのはありそうだ…。〔今日の彼女は随分と自分の殻を破って、生き生きとしている。母親が当番で一緒にプレイグループに居るからであつたろうが…。両手を振り上げ、空中にぐるぐると振り回している。これまでになく程に気分が高揚している。その嬉しさも特に何ごとやら誰かやらに関係してるといふことではまったくないようだが…。ようやく自分の場所を見つけたんだらう。皆と一緒に遊べなくもないといった自信が彼女の背中を後押している。やれやれといったところだ。〕

ミルク・サークルの時間が始まる前、<わたし、ママのお隣に座るわね・・・>と珍しくもはっきり意思表示をした。また同時に彼女の母親が他の誰か子どもに注意が向けられていてもそれでご機嫌が斜めになることもなかった。例えば、フェイが、ラシエルとは彼女の母親を間にして反対側の席に坐り、母親にもたれかかっていたのだが、全然気に止めているようではなかった。そしてラシエルが皆におやつの人参を配る番になった。お盆を手に持ち、一人ひとりに手渡してゆく。とても意気揚々としている。やる気も充分であり、注目を浴びていることを意識している。それからダンのところにきたとき、彼がまだミルクを飲み干していなかったのだが、彼女はそこで立ちどまった。母親がダンを後にして次の子に行きなさいと指示したのだが、それには耳を貸さず、その瞬間、彼女は自分の分の人参のステッキを一個取り上げ、自分の口へと入れた。彼女が皆に人参を手渡す‘お仕事’が途中半ばであったから、彼女の母親は娘の無作法に戸惑い、笑顔でラシエルに<それ、ママが取っておいてあげるからね・・・>と言う。そこでラシエルは自分の取り分がないのではなく、確実にあると知って安心したのか、またご機嫌よく最後まで他の子どもらに人参を配り終えることができた。[もはや何ら感情のないお人形ではない、なにやらいろんな思いがぎっしり詰まっている女の子になってきた。それで思いがけず‘ボロ’が出てきてしまったとしても、このままめげないでゆけたらいい。]

・1975/10/02・・・ラシエルが他の子どもらがドウ(練り粉)で遊んでいるところに立ち寄った。そこにシモーヌが通りすぎる。そして、やや唐突に彼女に、<結婚式にゆく？>と訊く。ラシエルは予期せぬ招待に驚いた顔をし、一瞬息を呑むふうだったが、それから顔を喜びで大きく輝かせ、<ええ、いいわ！！>と返答した。そこでシモーヌとラシエルとは2人一緒にドレッシング・コーナーへと向う。その後をすぐにハイジも追う。そしてどの子も、結婚式の日のために身を装う。長めのスカートを履き、頭にはベールを被る。そして身支度を整えた後、皆でスライド・ハウスの方へと向う。そこは今や結婚式が執り行われる‘教会’ということになっているんだそうだ。この時点で、ラシエルは日頃の彼女に似つかわしくなくとても活発で、生き生きとした様子なのには眼を瞠った。

ミルク・サークルの時間に、ラシエルがハイジと腕を組んでやってきた。そして2人で空席を見つけ、隣り合わせて座った。それからシモーヌもラシエルのお隣の席に座った。そしてラシエルがシモーヌにさもやさしげにキスをしているのを見た。彼女がご機嫌なムードでいる場合に、他の誰かに対して愛情やら親密感をそんなふうには直截に表現することは近頃ではそう珍しくない。[シモーヌはラシエルよりも3ヶ月年下、ハイジは6ヶ月ほど年下ではある。即ち、ラシエルが一番‘お姉ちゃん’というわけだ。意外にもここに至って、ラシエルはいいムードづくりをしていることになる！]

このしばらく後、ラシエルとハイジとが庭先で遊んでいた。どちらも乳母車を手にしている。ハイジがラシエルに<買い物に行かない？>と誘う。だが、ラシエルは<うん、わたしはお家へ帰るの No, I am going home・・・>と言う。ハイジが再び、<わたしたち一緒に買い物に出かけるんじゃないの？そうでしょ？>と誘う。ラシエルは<違うの。わたし、お家に帰るんだもの No, I am going home・・・>と答える。

そこで彼女は一人残され、そのままやや高揚した面持ちでジャンプを繰り返した。なぜそうしたい気分なのか、どうも今ひとつ理由が窺い知れなかったが・・・。ラシエルは運動機能が年齢よりもやや遅れているように見受けられる。次にはジャンプする代わりに、両腕をあげてブラブラと横に振り、指を拵げたり閉じたりし始めた。私に向けて大きな笑みが顔に浮かんでいた。確かになにか嬉しくて仕方がないといった身体表現ではあろうが、それらラシエルのすべての動作がちょっと赤ちゃんぽい。この幼稚さは何だろうか。まだまだ他の遊び友だちらへの牽引力として彼女が期待されるのは先のようなのだ。

〔ハイジの誘いを断り、ラシエルがくわたし、お家に帰るの I am going home > を強調したのが気になる。この場合のお家(home)とは何を意味していたんだろう。まさか、お家に帰ってママの言いつけをちゃんと聞かなくちゃ、わたし、いい子だもん・・・とでも言っているのだろうか？我が儘・気儘は許されていないといった窮屈なラシエルなのかしら。妙だ。まるで「人形の家」(イプセン)のノラみたい・・・可愛がられる娘、そして可愛がられる妻の典型かな？！〕

・1975/10/10・・・ラシエルがこれほどに意気盛んであったことはない。彼女はフィンガー・ペインティングに熱中したのだ。汚れることになんら抵抗も示さず、ゲラゲラ笑いをしたり、いくらか顔にはなにやら悪戯っぽい笑みを浮かべたりしている。それを終えたあと、彼女は手を洗いに洗面所に行った。机に戻ってきしてみると、ハイジに自分の椅子が取られちゃっているのを知る。そこでくわたしの椅子よ！>と言う。ハイジを実力行使で除けようとはしないものの、空いてるどの椅子も彼女には全然お気に召さない。くわたし、大きな椅子が欲しいの！>と宣言する。そこは廊下であったので、お部屋の中になら大きな椅子が見つかるかも知れないと私が彼女に示唆する。彼女は自分で探しに赴く。そしてしばらくして、彼女が大きな椅子を引きずってくる姿を見た。顔には満足げな表情が浮かんでいた。

〔自己主張するのも、それで他の子どもとの間に摩擦が起こるとしても、もはや怖がらなくなってきたようだ。これは凄い進歩である！ラシエルは、以前よりもっと意気軒昂で自信ありげに見えた。彼女は自分の服が絵の具で汚れが付いていることに全然かまわなかった。自分の恰好がぐちゃぐちゃであることにも構わないだけでなく、薄汚れた自分にも何ら脅かされることはなかった。実際、お遊戯の時間のあと、彼女は母親と会ったときも、あけっぴろげで、顔中大きな喜びに溢れていた。母親がどう反応したか、記録がないが・・・。〕

ミルク・サークルの時間に、ハリエッタに物語の読み聞かせしてもらい、それを聞きながら、ラシエルは鼻の穴をほじくっていた。全然周りを気にしないふうで、しばしその鼻ほじくりを執拗に続けていた。〔これはちょっと驚き。外も内もシミひとつないといった、かつてのラシエルとは見違えるほどの変貌だ。鼻ほじくりは或る種、‘自慰行為’でもあろうが。なにやら内側の自分の生き生きした情動のうごめきにもはや逆らえないといった印象である。それが傍からみて‘恰好悪いわたし’だとしても怖がらなくなったのかな。そうだといいが・・・。ただ、今ひとつ母親がそんなラシエルをどう思うかは別だが・・・。〕

【補記】

それからのラシエルについては知らない。母親が妊娠していたわけだから、なんらかの家庭内での事情があったのだろうか、ラシエルはプレイグループを去った。何ら前触れもなしに突然目の前から消えた。その後誰も彼女を話題にしない。『来るものは拒まず、去るものは追わず』、それがプレイグループの建て前だから変でもないが。だが何かしら気掛かりが残る。ラシエルの母親は若々しく小奇麗でキュートな女性だった。そもそもラシエルの服装からしてプレイグループにふさわしくない。他の子らは汚れていい遊び着を着て来るわけで。ラシエルの外見の愛らしさに母親が執している。そこには「汚しちゃいけません！」のメッセージがあるとしたら、まったくの場違いなのだ。人形としてラシエルをガラス・ケースの中に入れておけば、ボロは出ないだろう。彼女が生きた人として動き出すと、とんでもないボロが出ることになる。それを恐れ忌み嫌ったのではなかったか。つまり「感情表出」のことだが。おそらく母親はラシエルの変化に戸惑い、腰が引けたのかも知れない。いつラシエルは彼女にくわたり、ママのお人形さんなんかじゃないわよ！>って言うんだらうか。当分先の話だろう。どうも彼女らはマトリョーシカの‘入れ子人形’のような印象がある。案外赤ちゃんが生まれてきても、うまくそうした「入れ子人形家族」を彼女らはやり続けそう。そこではラシエルの「自己なるもの」の芽生えは窒息したままとらう。

ラシエルは、私に遠い昔の子どもだった頃の私自身を想起させる。茨城の『阿見小学校』にいた4、5年生の頃、私のクラスの子どもら大半には綽名が付いていた。当時、それがなぜか子どもらの間で流行したのだらう。因みに私の綽名(ニックネーム)は、「外人(ガイジン)さん」とか「アメリカ人」、それに「人形さん」というのもあった。私はこの「人形さん」というのが大嫌いだった。自分が‘空洞な存在’、つまり中身が生きていないのが誰彼に見透かされているようで内心怖れたのであったらう。その危惧の念が密かにあったからこそ余計に、私は<人形さんなんかじゃないもん！>と怒ってたんだらう。

ガラス・ケースの中のお人形さんみたいに、ちょっと触れば壊れそうぐらいに一見して‘綺麗綺麗な’ラシエル、滅多な事では自分を表出しようとしないう慎重で臆病な彼女に共感を抱きながら、ラシエルがいつくわたし、お人形さんじゃないもん！女の子だもの！>と言えるようになるのかと、私はそれを密かに待ち望んでいた気がする。彼女がシモーヌを受け入れ、遊び友だちになったとき、その端緒が開かれたとも言える。うまくいった、やれやれ！という気がした。

時として癩癩玉を破裂して凶暴にもなりうるシモーヌがラシエルにやさしく頬をキスされて嬉しがっている。これがまた愉快だった。確かに2人を一つにして半分にしたぐらいが理想の‘娘’かと内心笑いながら…。彼女らは絶妙なコンビネーションであった。この幸運 good luck が嬉しい。ラシエルがプレイグループを去った後も、少なくともこのプレイグループにいた短い間、彼女は活力に溢れた自分を知った。その一瞬の解放感の‘味’を忘れないだらう。そう私は祈る。

私はロンドンで受けた【パーソナル・アナリシス】について高く評価し得ないアンビヴァレントな思いをまだ

抱いている。だが、振り返って一つ良かったと思えることは、Miss. Weddellから〈boy part of yourself あなたの中の男の子の部分〉という言葉をもたらしたことだ。私にはなにやら違和感もあったが、‘珍しいもの’を耳にしたという新鮮な胸のときめきを一瞬覚えた。そんな記憶がおぼろにある。

積み木を一つずつ積み上げながら、半ばうろたえながら、おっかなびっくりでからだを震わせていたラシエルを偲ぶ。あの彼女の fragility(もろさ・ひよわさ)は何だろう。「積み木のタワー」はペニスの象徴でもある。それは、彼女の中の〈boy part of herself 男の子の部分〉への懸念から警戒もし、そして排斥もされていたのであろうか。ついぞ彼女の口からパパのことは聞かれなかったし、事実彼女はプレイグループと一緒に仲良しになる男の子は皆無であった。サイモンのように〈I want you!〉を執拗に彼女に訴えても、ラシエルにとって男の子はただ視野の外に弾かれていて、無視するしかなかった。男の子らにしても彼女は友達になりようがなかったとも言える。そこが、ややきめの粗い、悪さも男の子らとつるんで平気でやれちゃう女の子のアニヤとは違う。

ここで或る思い出が想起された。遠い昔々、北海道でのこと。父親の赴任先の移動で、私は北海道の旭川市内の『春光小学校』から『北鎮小学校』へと転校した。小学校2年生の後半の頃である。あの『春光小学校』当時の私は優等生で、担任の先生にはよく褒められた。女の子らにも人気があったようだ。席変えのとき、私のお隣の席に坐りたいとクラス中の女の子が殺到して大騒ぎになったことがある。その折私は誰をも選べず、どうしていいやら分からず、ただぼんやりと縮こまっていた記憶がある。そして、おそらく男の子らにも人気があったのだろう。あまりよくは覚えていないが・・・ところが、『北鎮小学校』に転校してしばらくして、前の『春光小学校』のクラスメートの男の子らが4～5人も大挙して突然に私の家を尋ねてきたことがあった。びっくり仰天だった。だが、内気で臆病だった私は彼らを歓迎するどころか、あまりにも戸惑い、怖じけてしまった。代わりに1歳半上のしっかり者の姉が彼らのお相手をしてくれて、それでどうにか間が持った。ゲームやらして一緒に遊んだのだろうが・・・あのときの情けない自分が忘れられない。懐かしいとか嬉しいとかの思いを表すことができない。男の子らにただ圧倒されていた。彼らに心を開いていない。おそらく母親がおもてなしをしてくれたのだろう。男の子らの歓声がさんざめく。やがて、〈チズコさまさま、サンマのシッポ!〉などと妙な作り歌を囃し立てながら、彼らは威勢よく棒切れを振り回しながら、薄暗くなった夜道を帰っていった。彼らを見送りながら、私は幾らか心残りを感じていた。そんな悲しいような嬉しいような、甘酸っぱい幼き日の思い出である。

そんなことがラシエルと重なる。そして、【パーソナル・アナリシス】を経て以来といえればいいのか、いつしか私は「元気な男の子」を探し始めるようになった。外にそして自分の内側にも・・・つまり個人的な交遊関係においては勿論だが、《日本野鳥の会》のお仲間と一緒に野山を歩くやら、スポーツジムでボクシングの真似事に興じたり・・・私の〈男の子の部分 boy part of myself〉を投影し、かつ摂り込めそうな「元気な男の子」に出会うチャンスを極力逃すまいとした。そして、彼らは‘私の一部’になった。だから今の私がいることになる。ラシエルはどうしたろうかとふと思う。 (2013/11/12 記)
